

グイ語における2つの畳語パラダイムの相互作用音韻史

中川裕

1. 研究の背景と目的

一般的に声調交替はシンタグマティックな視点から説明されることが多い：隣接する声調の間に働く同化(tonal spreading)、異化(tonal OCP)、短縮(truncation, contraction)の視点から、声調交替プロセス・共時的変異・歴史的変化のメカニズムの説明をするのが従来の考察の主流である (e.g. Gordon 2016: 235-241, Hyman 2007)。

ところが、声調交替の現象には、このようなシンタグマティックな側面だけでなく、パラディグマティックな側面を考慮して初めて、その本質をよりよく理解することができる場合がある。本研究は、そのような事例として、南部アフリカで話される声調言語である**グイ語**（コイサン諸語コエ語族カラハリ・コエ語派）における、2種類の畳語プロセスに關与する声調交替を取り上げる。そこに観察される、不可解に見えるほどの体系上の不均整を説明するためには、パラディグマティックな視点が必須となることを示す。

2. 考察対象となる現象：グイ語の反復畳語と使役畳語に關与する声調交替

グイ語の語根は2モーラからなり、次の6種類の声調メロディーのどれかを基底声調としてもつ：声調メロディー目録 {HH, HM, HL, MM, LL, LM}。

これらの声調メロディーは形態論的プロセスにおいて交替することがある。その際の声調交替は目録の内部で起き、声調交替が6種類以外のメロディーを生み出すことはない。

グイ語の動詞形態論には2種類の畳語プロセス（反復畳語と使役畳語）がある。これらの畳語の派生には、語根の**重複**と**声調交替**とが關与する。重複は分節音的に両プロセス共通であるため、反復畳語と使役畳語との形式上の違いは声調により実現する。

例えば、gláò (声調HL)「加速する」という動詞は、(1)(2)のように畳語に派生する。

(1)反復畳語 gláò > gláò-gláò 「繰り返し加速する」
HL > HL-LL (声調保持: HL→HL)

(2)使役畳語 gláò > glāō-gláò 「加速させる」
HL > MM-LL (声調交替: HL→MM)

反復畳語では、(1)の通り、重複の第1要素の声調メロディーが保持される(HL→HL)。これに対して、使役畳語では、(2)の通り、重複の第1要素の声調メロディーが交替する(HL→MM)。一方、第2要素の声調はいずれの畳語プロセスでも、語根の基底声調が何であれ、常にLLとなり反復畳語と使役畳語の区別には關与しない。この例から分かる通り、当該2種類の畳語形の区別には重複の第1要素(ハイフンの前)の声調が決定的になる。本研究は、第1要素に現れる声調交替を考察対象とし、第2要素のLLへの交替は扱わない。

3. 反復疊語と使役疊語の派生に關与する声調交替：不均整体系

第1要素を派生する声調交替/保持の規則は図1の(1)と(2)に矢印で示す通りである。

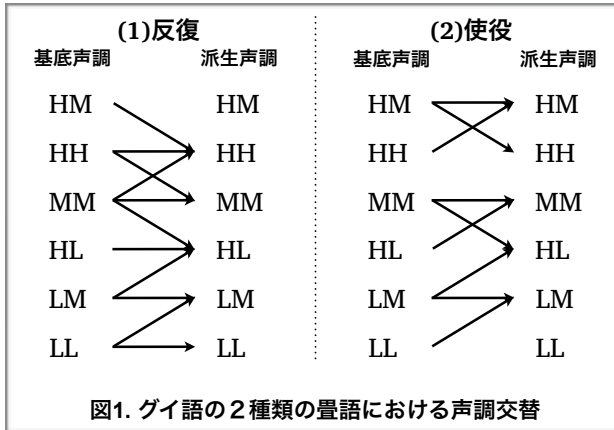
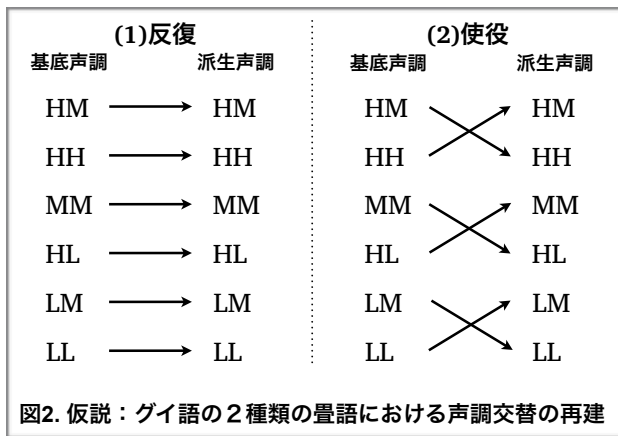


図1(1)(2)のパラダイム(規則セット)は、複雑な不均整で特徴付けられる。第1に、矢印が分岐・合流することから分かる通り、基底声調と派生声調は1対1の対応をしない：分岐は、語彙的に条件づけられている場合もあれば、自由変異の場合もある；合流は、基底声調の区別を中和してしまう。第2に、(1)と(2)の異なる疊語派生に6つの同一プロセスが認められる：同一プロセスは(1)と(2)の疊語形を合流させてしまう。

4. 不均整体系の通時的説明：パラダイグマティックな視点

図1(1)(2)に観察されるこの複雑な不均整はどのように説明することができるか？本研究

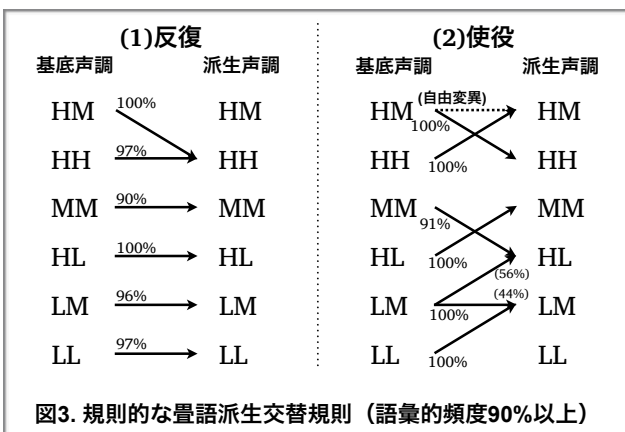


は、この問題に通時的な解答を与える。まず、図1の不均整体系の歴史を遡って、図2に示す均整体系を再建する。そして、均整体系(図2)が不均整体系(図1)に至るまでの通時的变化を、(1)と(2)の間に生じる相互作用の連鎖史として提案する。連鎖する音韻史的出来事は、(i)派生声調メロディー目録の縮小、(ii)声調メロディーの2義性発生、(iii)その2義性の回避である。

5. 均整体系[図2]から不均整体系[図1]が出現するシナリオ

5.1 規則的な疊語派生交替規則

図1に示した疊語派生の交替規則には、ごく限られた語彙素に個別に見られる不規則な交替が含まれる。個別の語彙素の歴史的



事情ではなく、疊語派生パラダイムの体系上の歴史再建のために、ここで、図1から語彙個別的な不規則交替を除外し、語彙的な適用頻度が90%以上の、規則的な交替だけを図3に示す。

図3の通り、規則的な交替だけを見ても、(1)と(2)は複雑な不均整で特徴付けられ、そこには次の3特徴が認められる：

- ① 2つの分岐：HM→HM/HH (自由変異); LM→HL/LM (語彙的に決定)
- ② 4つの合流：HM/HH→HH; HM/HH→HM; MM/LM→HL; LM/LL→LM
- ③ 畳語(1)(2)を交差する2つの2義的交替：HM→HH, LM→LM

以下で展開する議論は、図2の体系からこの図3の体系に至るまでのシナリオになる。

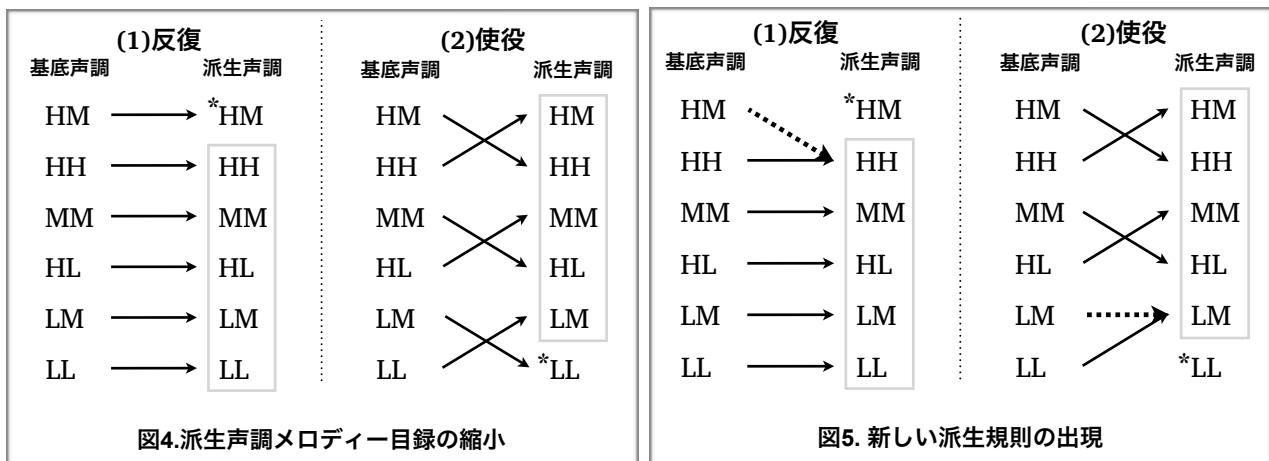
5.2 派生声調メロディー目録の縮小（それに伴う新交替規則の出現）

図2に示した均整体系に、最初の段階で起きた体系上の変化は、派生声調メロディー目録の縮小だった。つまり、図4のように、(1)の派生声調HMと、(2)の派生声調LLとが使われなくなり、目録から消えた（消失した派生声調に*を付し、縮小した目録を灰色線で囲んである）。その背景には、図5の点線矢印で示す通り、(1)にはHM→HHの新規則、(2)にはLM→LMの新規則の出現があった。すなわち、派生声調（＝規則の出力）において、

(1)ではHMとHHの中和とHHへの合流

(2)ではLMとLLの中和とLMへの合流

が起きた。なお、どちらの新規則の発生についても、中和・合流の基盤には、2つの声調メロディーの音声的な類似が認められる：HMとHH及びLLとLMは開始声調が同じ。



5.3 派生声調メロディーの2義性の発生

出現した2つの新規則は、(1)と(2)の2つのパラダイムを横断する仕方で、派生声調の2義性を生み出す（図6の太線矢印が示す通り）。そして、この2義性の回避が、次の段階の体系的变化の引き金となった。その体系的変化とは2つの分岐的交替規則の発生である。

図7は、2つの2義性を避けるために出現した2つの新プロセスを点線矢印で示している。規則HM→HHの2義性はHM→HH (自由変異) を追加的に生み出し、その一方で、規則LM→LMの2義性はLM→HL (語彙的条件付け) を追加的に生み出した。

2義性を回避するHM→HHとLM→HLが加わった結果、図8(1)(2)に挙げる分岐的交替規則が使役畳語パラダイムに出現し、体系の不均整は増大し、図3に示した最終段階を迎えた。

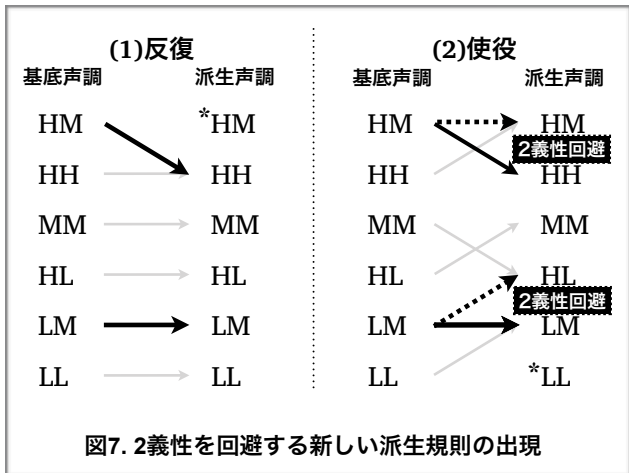
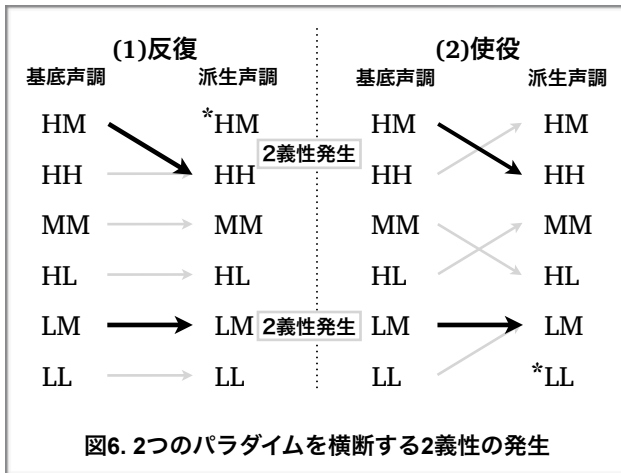
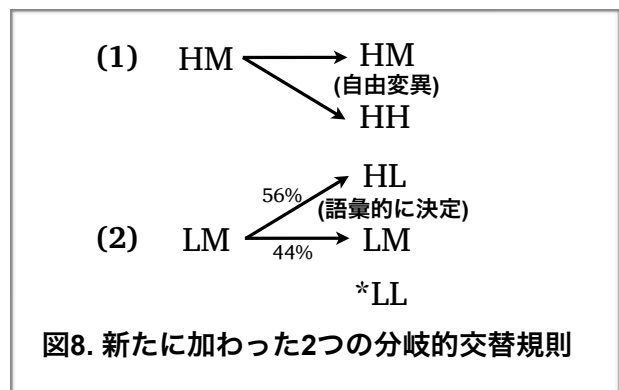


図8(1)(2)の分岐的交替規則は、それぞれ2つの派生声調(=変異形)を出力する。変異形の分布には、(1)自由変異と(2)語彙的条件付けという違いがあるが、どちらの規則も変異をもつ点で共通する。(1)の自由変異は、2義性が問題となる文脈で変異形を選択できる柔軟性を持ち、(2)の語彙的決定は、2義性が生じやすい語意か否かに条件づけられている可能性がある。分岐的交替規則がもつこの性質は、(1)(2)の規則出現の引き金が2義性の回避にあったと考える見解に呼応する。



(なお、図8(2)の新出力となったHLは、再建パラダイムの当該規則の旧出力であるLLと音声的に類似している: LLは音声的には下降調で実現し、末尾声調はHLと同じL。)

6. 結論

豊語パラダイムの均整体系から不均整体系までの歴史は次の3段階に要約できる。

- 第1段階：派生声調目録縮小と合流規則出現
- 第2段階：2つのパラダイムを横断する2義性の発生
- 第3段階：2義性を回避する分岐的規則の出現

第2、3段階に認められる2義性の発生とその回避は、反復豊語と使役豊語の相互作用に着目して初めて理解することができる。このグイ語の事例はパラディグマティックな視点が声調交替の理解には重要な役割を果たしうることを示す。

参考文献

- Hyman, L. (2007). Universals of tone rules: 30 years later, in T. Riad & C. Gussenhoven (eds.), *Tones and Tunes: Studies in Word and Sentences Prosody*. Berlin: Mouton de Gruyter, 1-34.
- Gordon, M. (2016). *Phonological Typology*. Oxford University Press.
- (本研究はJSPS科研費 [課題番号16H01925, 25300029] の助成を受けている。)